

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520188

研究課題名(和文)ニコラウス・ペヴスナー研究 その芸術文化史学の形成と構想

研究課題名(英文)A study on Sir Nikolaus Pevsner's diverse art-cultural studies

研究代表者

近藤 存志 (Kondo, Ariyuki)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00323288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀を代表する芸術文化史家ニコラウス・ペヴスナーが、その多角的研究を通して確立するに至ったペヴスナー特有の芸術文化史学の基本構造を明らかにしようとするものであった。1930年代初頭、第2次世界大戦目前の混乱期に、彼の中には「芸術文化史研究にも現代社会と現代人に対して果たし得る実務的役割が存在するはずである」という確信が芽生えた。実用主義者であったペヴスナーは、人間の芸術的営みが、何かしらの実用性、実務的存在意義をもつべきであることを常に主張していたが、自らが建築、絵画、デザインの諸領域を横断的に扱って展開した芸術文化史研究にも同様の実務的役割があると信じていた。

研究成果の概要(英文)：According to Sir Nikolaus Pevsner, the historian must always be aware of "contemporary developments" in society and must confront "contemporary needs". Galvanized by the dire social conditions in Germany in the early 1930s, Pevsner came to assert that the art historian whose subject of interest is the "visual expression of the history of man's mind" can no longer shut himself off from contemporary needs. In Pevsner's view, art historians had to "reconcile scholarship and direct utility" and, through their knowledge and appreciation of how artists and designers in the past confronted the needs of their times and worked for the good of society, could contribute to their contemporary society. Such functionalist-views of Pevsner constituted the bedrock of his diverse art-cultural studies, unhindered by distinctions between different types of artistic creation, viz., painting, architecture, decorative arts and industrial design, etc.

研究分野：イギリス芸術文化史

キーワード：ニコラウス・ペヴスナー 芸術文化史 近代デザイン史 イギリス美術史 時代精神 中世主義

1. 研究開始当初の背景

ニコラウス・ペヴスナー (Sir Nikolaus Pevsner, 1902-83) はその生涯を通じて、イタリア・バロック期の建築と絵画から 20 世紀のモダニズムのデザイン運動、さらには彼自身が生きた激動の第 2 次世界大戦中と戦後の西洋社会の同時代的諸相に至るまで、きわめて広範な時代とテーマを研究対象にした。ペヴスナーが多角的な芸術文化研究を展開することになった背景には、彼が建築、美術、デザインといった諸芸術分野の既成の枠組みを取り払い、あらゆる芸術的創造物を一体的に捉えたことが大きく影響していたと考えられる。たとえばペヴスナーは、あらゆる知的探究、芸術的創造、さらに社会的活動に浸透し、それらに著しい影響を与える時代精神の存在を強く確信していた。そして建築、美術、デザインといった諸芸術分野を、等しくこの時代精神の表出物として捉えた。そうすることで、彼は異なる様々な時代の、多彩な芸術文化的営みを総合的に解釈しようとするようになったと考えられる。

ペヴスナーのこうした関心は数多くの著作物に結実し、それらは今日、建築史、美術史、デザイン史の各分野の基本文献とされているのみならず、芸術文化全般に対する社会的関心の拡充に大きな役割を果たすことになった。これら一連の研究成果が、芸術文化史研究全般に与えた影響の大きさは、2002 年に生誕 100 年を記念してペヴスナーの業績を振り返るシンポジウムがロンドンで開催された事実や、2011 年に長大なペヴスナー伝が刊行された事実などからも明らかである。しかし一方で、ペヴスナーの芸術文化史学は彼の主要著作を中心に説明されるようになり、多様な領域を自由に横断して取り扱ったペヴスナーの芸術文化史学のダイナミズム、そして彼の芸術文化史研究者としての問題意識と多角的研究活動の原動力については、これまで十分に検討されてきたとはいえない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20 世紀を代表する芸術文化史家ニコラウス・ペヴスナーがその多角的研究を通して確立するに至ったペヴスナー特有の芸術文化史学の基本構造を明らかにしようとするものであった。ペヴスナーの個々の研究業績に向けられてきた広範な関心と比べ、これまで十分に検討されなかったペヴスナー特有の芸術文化史学の基本構造を明らかにすることによって、建築、絵画、デザイン、思想、時代精神を総合的に捉えたペヴスナー特有の芸術文化史学の歴史的、体系的把握を目指した。

3. 研究の方法

本研究では、大きく以下の 3 つのテーマについて検討することによって、研究目的の達成を目指した。

1930 年代前半のドイツにおける政治・社会

状況がペヴスナーの芸術文化史観の形成に与えた影響

ペヴスナーの芸術文化史研究における時代精神の意味

ペヴスナーの芸術文化史研究における芸術地理学的手法

4. 研究成果

(1) 1930 年代のドイツでの経験

ペヴスナーは、1902 年にライプツィヒのロシア系ユダヤ人家庭に生まれた。彼はライプツィヒ、ミュンヘン、ベルリン、フランクフルトの各大学で、ウィルヘルム・ピンダー (Wilhelm Pinder, 1878-1947) やハインリヒ・ヴェルフリン (Heinrich Wölfflin, 1864-1945) アドルフ・ゴルトウシュミット (Adolph Goldschmidt, 1863-1944) といった優れた教授たちの下で芸術文化史 (美術史・建築史) を学んだ¹。ペヴスナーは、1924 年にライプツィヒの商人たちが建てた都市住宅を中心としたバロック建築の研究、「ライプツィヒにおけるバロック期の建築」(*Die Baukunst der Barockzeit in Leipzig*) によってライプツィヒ大学から博士号を取得し、その後 1928 年までドレスデン美術館に勤務した。その間、1927 年にはミケランジェロからポントルモ、そしてティントレットとカラヴァッジョに至る 16 世紀および 17 世紀初頭のイタリア・マニエリスム絵画に関する教授資格論文を完成させて、1929 年からはゲッティンゲン大学において私講師として美術史・建築史を講じるようになった。ペヴスナーはまもなく美術史の分野におけるゲッティンゲン大学の知名度を上げるうえで重要な役割を果たしたが、1933 年にナチス政権が誕生すると「民族純化法」によって教職を追われ、以後イギリスを拠点に建築史、美術史、デザイン史、デザイン理論等の分野で活発な研究、教育、執筆活動を展開した。

1930 年代初頭、第 2 次世界大戦目前の混乱期を生きた彼自身の経験は、バロック建築やマニエリスム絵画など、いわゆるハイ・アートの研究の傍ら、かなり早い時期から美術史・建築史研究の主題として一般大衆の日常生活を支える大量生産品と生活空間としての建築について考える姿勢を彼の中に育んだ。ワイマール共和国の崩壊から、国家社会主義の台頭、そして全体主義の拡大へと、目まぐるしく変わる政治・社会情勢と、一般社会の様々な営みが否応なしにその影響を受ける様を目撃し、青年ペヴスナーの中に「歴史家は現代社会と無関係には存在し得ない」² という確信が芽生えた。そうして彼は、一人の芸術文化史家として、「ワイマール共和国終焉期に建設された大衆向け大規模住宅開発の価値」³、「戦時下において日常の美を再発見することの意義」⁴、そして「政治や権力者に利用されない芸術の尊さ」といった、その時代の社会や政治状況と深く結びついた主題に関心を向けるようになった。

(2) 現代社会の実際的問題に対する歴史研究の有用性

戦後ペヴスナーは、1928年から1930年代にかけての自分を振り返り、自分の生きてきた現実社会を直視した時、「美辞麗句をもてあそぶことなく、現実の社会問題に対してより一層責任を果たし得る芸術・デザインの必要性を感じはじめた」³と述懐している。

「現実の社会問題に対して責任を果たし得る芸術・デザイン」に対するペヴスナーの関心は、新たな研究テーマと研究視点を生み出すことになったが、それらはいずれも現代を過去と断絶したものとして捉えるのではなく、伝統的な文化史、美術史、建築史研究の手法との結びつきの中で展開された。そして、現代の社会問題と芸術との結びつき、つまりは社会問題としての芸術を考察の対象とした時、ペヴスナーは中世の時代の芸術的営みに範となる重要な価値を認めることになった。

自分の生きる時代の社会や政治状況と深く結びついた芸術・デザイン動向に注目したペヴスナーの論稿は、彼がイギリスに移住した後の1930年代中頃から1940年代中頃にかけて相次いで発表された。それらの論文の中でペヴスナーは、「歴史家の研究が現代社会と無関係には存在し得ない」との立場から中世以後のヨーロッパ芸術が「段階的に後退・退廃の一途」を辿っていることを指摘し、さらに現代が理想視すべき時代として中世を強調した。彼はまた、精神的共同体 (Spiritual Unity) としてのコミュニティの重要性を強調するとともに、1930年代のヨーロッパ社会を席卷していた「極端な個人主義」(extremes Individualismus) と「自由主義」(Liberalismus)、「ますます拡大する物質至上主義」(Sublimierter Materialismus) を批判し、現代社会が中世を範として改革されるべきであるとの主張を展開した。

この頃、ペヴスナーは、商業的利潤や営利的判断を優先させる社会傾向が、デザイナーの新たな芸術的挑戦を阻害していると考えようになり、商業的利潤と営利的判断が過剰に影響力を有しているデザイン界の現状に対する批判を展開するようになった。さらに一部の富裕層のために芸術家が働くこと、芸術家が商業的利潤や営利的判断を優先させること、そして芸術家が「高僧」を気取って、庶民の生活上の要求に応じた製品を芸術作品と見做そうとしないこと、などを厳しく批判した。ペヴスナーによれば、こうした傾向の元凶はルネサンスの時代に、芸術家たちが自分たちを「権力者や富裕層の庇護のもと、上流富裕層のために働く存在、一般大衆と異なる特別な存在」、「大衆の趣味、好み、ニーズに謙虚に聞き従う必要のない存在」として自覚するようになったこと、すなわちルネサンスの時代に芸術家の自己認識に起こった変化の中にあると判断した。それゆえペヴスナーは、自身の初期の代表的著作になった『モダン・ムーブメントのパイオニアたち モリ

スからグロピウスまで』(Pioneers of the Modern Movement: From William Morris to Walter Gropius, 1936)の中で、ルネサンスの時代に「芸術家は、無教養で品の無い、貧しい生活を送る庶民との関係を絶ち、そうした階層の人びとの日常的な要求のために自分たちが働く必要はないと考えるようになった」⁴と断定した。

ペヴスナーは戦後も、デザイナーや建築家、芸術家が一般大衆に対して優越感を抱くことの問題性を、歴史家の立場からデザインの実践者たちに直接、繰り返し訴えた。たとえば彼は1960年代前半のアメリカで、実際に建築設計に従事していた建築家たちを前に、「何が(そして誰が)質に影響を与えるのか」(“What (and Who) Influences Quality”)と題して語る機会があったが、その時もペヴスナーは「今日の建築家・デザイナーの間に、自己顕示欲を造形的、視覚的に表明する傾向が拡大」していることを痛烈に批判している。

ペヴスナーはルネサンス的(あるいはルネサンス以降の)芸術創造の動機を批判する一方で、中世における無名の棟梁や石工たちの芸術創造の営みに、ルネサンス的職業芸術家に対するアンチテーゼとしての価値を見出していた。商業的・営利的関心が介入する余地なく、新しい芸術的表現の模索に貪欲に励んだ中世の芸術家(石工、棟梁)たちは、自分たちの名前が歴史に刻まれることに関心を持たなかった。これら先人たちの芸術活動に、ペヴスナーは大量生産時代のデザイン・建築の芸術性を向上させる鍵を見出した。たとえば、『モダン・ムーブメントのパイオニアたち』の中で、ペヴスナーは「19世紀に入ると芸術家は急速に、芸術の‘utility’、実用性と公共の必要を軽蔑するようになり、自分の生きる時代の現実生活から自分たちを乖離させるようになった」⁵、そして「彼らは同時代の圧倒的多数の人びとからはあざ笑われる存在となり、ごく少数の批評家と経済的に裕福な芸術愛好家たちによってのみ嘆賞されるようになってしまった」と指摘している⁵。そのうえで、「芸術家と芸術を取り巻くそうした問題状況が一切存在しなかった時代」が「中世である」と述べ、「中世では、芸術家は熟練した職人で、彼らは仕事を選ばず、何においても自らが持ち得る技量のすべてを最大限に駆使して、依頼された仕事に打ち込むことを誇りとした」と強調している⁶。ペヴスナーがルネサンス的芸術創造の動機と中世の芸術創造の原動力との対極性を指摘するだけにとどまらず、大量生産時代のデザイン製品と、中世芸術を結びつける記述を残していることも、重要であろう。1930年代から40年代を通じてペヴスナーは、大量生産時代のデザインのあるべき姿を模索し方向づけた先人たちを、中世の無名の石工や棟梁たちと結びつけ、そして大量生産時代としての近現代を中世社会と結びつけて論じた。大量生産時代の芸術的課題として、ペヴスナーは「現世的

名声や経済的成功といった問題から自由であった中世の職人たちの生き方に学ぶべき点があると考えたのである。モリスからグロピウスに至る近代デザインの先駆者たちの偉業を、中世の無名の芸術家たちと結びつけて説明したのも、こうした意図によるものであったと思われる。

ペヴスナーの中には、「ルネサンスの芸術家に、中世の芸術家ほどの信仰心があったなら、ルネサンスはもっと輝きを放つことができたであろうに」との思いがあった⁷。そして中世における芸術創造の営みとルネサンス時代における芸術創造の営みの間に観察される著しい対照性は、ペヴスナーが実際に生きた20世紀の同時代的芸術創造のあり様を考えるうえでも、重要な指針となり得るものであった。ペヴスナーの中世に対する関心、そしてルネサンスの芸術に対する関心は、常に歴史研究の現代的有用性を確信する立場を基盤にしていた。

ペヴスナーは、人間の芸術的営みが、社会と時代の実際要求に応える有用性を第一義的な目的、存在理由としていることを望んでいた。このことは、彼が中世的芸術創造のあり方、すなわちルネサンス以降の芸術家の芸術創造の主たる動機としての自己顕示欲や名声への執着心とは対極的な芸術創造の姿勢を、現代に復興させようとしたことを意味している。

ペヴスナーは、中世の芸術創造のあり方には、以下のような点で、現代における芸術的創造・生産行為の範となり得る姿勢が貫かれていると考えた。

芸術創造行為が個人の利益・利潤や商業的判断によって制約を受けず、芸術家は新しいことに挑戦する意思と覚悟を持ち併せる。

芸術家は高い次元での強い使命感によって芸術を生み出すために、芸術家個人の名声の獲得や経済的成功は重視されない。

ペヴスナーは、19世紀のゴシック・リヴァイヴァリスト、A・W・N・ピュージンのように中世的キリスト教信仰の再興を自分の時代における芸術の発展、向上の前提条件として強調したわけではない。しかし「信仰」のような、人間の自己顕示欲や名声欲を超越する権威、価値、存在の下に、芸術創造行為が謙遜に営まれることに彼が絶対的な重要性を見出していたことは疑いがない。

(3) 実学としての芸術文化史学 芸術研究の能動性を信じて

ペヴスナーのこうした考えは、「実用主義」という概念に集約された感がある。彼は「芸術のための芸術」、「芸術家のための芸術」という考え方を容認することはできなかった。それゆえ、彼は印象派絵画を強く嫌った。

ペヴスナーによる時代精神の強調も、彼が人間の芸術的営みの根元的原理をその実用性に見出していたことと強く結びついてい

た。彼は芸術家の作品・創造物の価値を、それが同時代の必要をどれほど満たしているか、という点に着目して説明した。そしてこの同時代の必要とは、社会制度、価値観、宗教、市民の社会生活のあり様、学問、そしてそれらすべてに浸透している時代精神を反映するものであった。ペヴスナーは、この芸術家が自らの才能によって応えなければならない、あるいは満たさなければならない同時代の必要と時代精神との分かち難い連関関係を強調することによって、芸術文化史研究に占める時代精神の重要性を強調したのである。

ペヴスナーは、芸術家が自ら生きる社会の同時代的必要に応える作品を生み出そうとするときに、少なからず影響力を発揮する要素として、地域性、国民性、気候などにも注目した。こうした研究アプローチを彼は「芸術地理学」と呼んだが、その目的は「ひとつの国民（民族）の芸術創造行為」を特定の性格に限定して捉えようとするものではなかった。ペヴスナー自身、ナショナリスティックな感情に突き動かされて特定の国民・民族が生んだ芸術に国民性や民族性の現れを指摘しようとした研究の存在や系譜について認識してはいたが、そうした研究の継承者になることには全く関心を持たなかった。むしろ彼は、「ひとつの国民」が生み出す多様な芸術のあり様を確認し、強調することに熱心であった。時代精神は移り変わるものであり、社会に見出される様々な必要・ニーズもまた、時代を経て変容するものである。ペヴスナーは、そうした変容の影響の下で「ひとつの国民」においていかに多様な芸術的反応が示され、実用性を伴う多彩な芸術作品が生み出されてきたかを論じることに情熱を注いだ。

(4) ペヴスナーの能動的芸術文化史研究

ペヴスナーは、学生時代から歴史を学ぶ価値を「優れた先人たちが、様々な局面でどのように行動してきたかを知ることにある」と考えていた。ペヴスナーによれば、歴史研究の重要な存在意義は、様々な時代や社会における特定の局面において先人たちが示した反応、下した決断、採用した行動から、現代の人びとが何かしら教訓を汲み取ることのできる機会を提供することにあった。ペヴスナーの芸術文化史学の基軸には、優れた先人たちの行動と判断を、同時代の人びと、そして将来の人びとの行動と判断に対する有効な資源となり得る情報として提示するという、歴史研究の実用性、芸術文化史研究の能動性を、徹底して追求する姿勢が貫かれていた。

既に触れたとおり、ペヴスナーは1930年代初頭、第2次世界大戦目前の混乱期に目まぐるしく変わる政治情勢と、一般社会の様々な日常的営みがそうした政治情勢の影響を否応なしに受ける様を目撃した。その経験は、ペヴスナーの中に芸術文化史研究にも現代社会と現代人に対して果たし得る実際の役割が存在するはずであるという確信を生み出し

た。人間の芸術的営みが、何かしらの 実用性、実用的存在意義をもつべきであるのと同様に、ペヴスナーは芸術文化史研究にも同様の、実用的役割を求めたのである。

(注)

1. Ariyuki Kondo (2014). Pevsner on Graphic Design: Transnationality and the Historiography of Design, *Iridescent: Icoagrada Journal of Design Research*, 2(4) [http://iridescent.icoagrada.org/2014/02/13/pevsner_on_graphic_design_transnationality_and_the_historiography_of_design.php (2014年8月20日アクセス)] を参照。
2. Cf. Nikolaus Pevsner, 'Kunst und Staat', *Der Türmer*, vol. 36, 1934, S. 514-17.
3. William B. O'Neal, *Sir Nikolaus Pevsner: The American Association of Architectural Bibliographers, Papers*, vol. VII, Charlottesville, VA: The University Press of Virginia, 1970, x.
4. Nikolaus Pevsner, *Pioneers of the Modern Movement: From William Morris to Walter Gropius*, London: Faber & Faber, 1936, p. 21.
5. *Ibid.*, p. 22.
6. *Ibid.*
7. Nikolaus Pevsner, *The Leaves of Southwell*, London and New York, The King Penguin Books, 1945, pp. 66-67.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. 近藤存志、「ニコラウス・ペヴスナーの作者不詳の美学 大量生産時代の芸術的課題」『フェリス女学院大学文学部紀要』50号、査読無、2015年3月、19-57頁。
2. Ariyuki Kondo, "Pevsner on Democracy in Architecture: 1947-1972"『フェリス女学院大学文学部紀要』49号、査読無、2014年3月、1-15頁。
3. Ariyuki Kondo, "Pevsner on Graphic Design: Transnationality and the Historiography of Design", *Iridescent: Icoagrada Journal of Design Research*, vol. 2, no. 4, ICOGRADA, International Council of Communication Design, 査読有, February 2014, pp. 5-14. (<http://www.ingentaconnect.com/content/bloomsbury/irid/2012/00000002/00000004/art00002>)
4. 近藤存志、「ヘンリー・A・ティピング著『イングランドの邸宅建築』と『イングランドの庭園』について」、『写真図説 イギリスの邸宅建築と庭園 別冊日本語解説』エディション・シナプス、査読無、2013年9月、7-15頁。
5. Ariyuki Kondo, "Pevsner on Design Education: Meeting Contemporary Needs through the Teaching of Art History", *Design Frontiers: Territories, Concepts, Technologies*, eds. Priscila Lena Farias, et al., São Paulo: Blücher, 査読有, 2012, pp. 54-58.

[学会発表](計5件)

1. Ariyuki Kondo, "Quiet, Humane and 'Anonymous': Pevsner's art-historical response to wartime", 2014 Annual Design History Society Conference: "Design for War and Peace", University of Oxford, Oxford, UK. September 2014.
2. Ariyuki Kondo, "Creativity within a National-Geographical Framework: Pevsner's 'The Geography of Art' in the Context of Modern Japanese Design History", 2013 Annual Design History Society Conference: "Towards Global Histories of Design: Postcolonial Perspectives", National Institute of Design, Ahmedabad, India. September 2013.
3. Ariyuki Kondo, "Distrusting 'the Taste of the Majority': Pevsner on Democracy in Architecture", 19th International Congress of Aesthetics, Jagiellonian University, Krakow, Poland. July 2013.
4. Ariyuki Kondo, "Pevsner on Graphic Design: Transnationality and the Historiography of Design", 2012 AIGA Design Educators Conference — Geographics: Design, Education and the Transnational Terrain, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, Hawaii, USA. December 2012.
5. Ariyuki Kondo, "Pevsner on Design Education: Meeting Contemporary Needs through the Teaching of Art History", 2012 ICDHS, 8th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, Universidade Presbiteriana Mackenzie and Universidade de São Paulo, Sao Paulo, Brazil. September 2012.

[図書](計2件)

1. Ariyuki Kondo, "Creativity within a Geographical-National Framework: From Modern Japanese Design to Pevsner's Art Geography", in Grace Lees-Maffei and Kjetil Fallan, eds., *Designing Worlds: National Design Histories in an Age of Globalization*, Oxford and New York: Berghahn Books. January 2016.
2. 近藤存志 『光と影で見る近代建築』(KADOKAWA/角川学芸出版、2015年6月)

[その他]

ホームページ等
University of Oxford: Podcasts (<http://podcasts.ox.ac.uk>)
"Design for War and Peace": 2014 Annual Design History Society Conference (<http://podcasts.ox.ac.uk/quiet-humane-and-anonymous-pevsner-s-art-historical-response-wartime>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 存志 (KONDO, Ariyuki)
フェリス女学院大学・文学部・教授
研究者番号: 00323288